

この教材のおもな流れ

「最近、家族と一緒にある国に引っ越してきたばかりの子どもが突然の大地震に遭遇!? 安全に安心して避難することができるのでしょうか…?」という設定のシミュレーションゲームです。付属CDに収録されている動画に沿って、活動していきます。

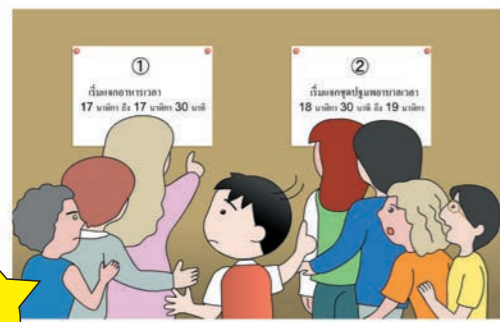
設定

- あなたは、小学5年生です。
- 最近、家族と一緒にこの国に引っ越してきたばかりです。
- まだ、この国のこと、この国の言葉や新しい学校のことがあまりよくわかりません。



状況設定

他の人たちは列に並びはじめました。



何が書かれているんだろう?

ふりかえりのポイント例

- ことばがわからない状態で、避難しなくてはならなかった気持ちの共有
- もし逆の立場になって、言葉がわからずに困っている人がいたら、どうしてあげるとよいだろう?
- 身の回りの施設や学校などに、避難場所や避難経路などについては多言語で標示されているだろうか?
- 防災マニュアルなどには、外国籍住民が置かれる状況についても考慮されているだろうか?

発展学習例

- アクションプランづくり
- 多文化共生の視点からの校内・地域安全マップづくり
- 多言語・絵文字を使った掲示物（標示）づくり
- ……など



大地震発生



家族が揃って一安心。でも、大変だったなあ…

このワークを体験した方々の感想…

- わからない言語での放送は、全く理解できず、不安を増幅させた。普段、黄色の標識が危険を表わしていることは知っているのに、ワークでは書かれている文字が読めないことでパニックになり、なぜか黄色の標識の方に進んでしまった。
- 読めない文字で書かれた標示は、さらに不安感を与えていた。必要最小限の情報提供が大切だと感じた。
- 配給の場面で、何ももらえず疎外感を感じた。食べ物ももらえないのは、本当につらかった。
- 何が起きているのかがわからず、周りの様子を常に伺っていた。とても大きなストレスを感じた。

対象
小学4年生以上

「言葉がわからない」体験ゲーム (震災編)

何が起った?

このワークショップを通して、言葉がわからないことから生じる不安な気持ちを体感します。その体験をもとに、全ての人にとって暮らしやすい「多文化共生社会」をつくるために、自分たちでできることを主体的に考え、実行するためのきっかけとなることをねらいとする教材です。国際教育、人権教育などの授業や防災に関する講座などで、ぜひご活用ください。



地域で暮らす外国にルーツをもつ方々で、日本語から情報を得ることに難しさを感じる方々の日々の生活での苦労や不安についてさらに広く理解を促したいと考えました。そこで、そうした方々が置かれている厳しい状況がより増幅する災害発生時を想定した教材を開発しました。内閣府では、外国人を災害時要援護者と位置付けています。この教材が、そうした外国の方たちと共に全ての人たちにとって住みよい地域をつくるための日頃からの備えや配慮について検討するきっかけになればと考えています。本教材をきっかけに、地域の多文化共生について自らのこととして考えられる人たちが増え、足元からの地道な行動や活動につながっていくことを願っています。

1セット **1,500円** (税込)
(滋賀県国際協会会員価格 1,000円)

【セット内容】

- 解説書
 - 指導者マニュアル
 - 県内に暮らす外国にルーツを持つ方たちの体験談
 - 新潟県中越沖地震を体験した留学生の体験談
 - ふりかえりシート
 - リソース集 など
- 付属CD
 - 動画ファイル(オリジナル版、短縮版)
 - 素材ファイル(ブラカード、音声素材、小道具用イラスト素材、写真素材) など
- ワークショップ用ブラカード (8枚)

●お問合せ先

公益財団法人 滋賀県国際協会

〒520-0801 滋賀県大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2階
TEL.077-526-0931 / FAX.077-510-0601
○E-mail: info@s-i-a.or.jp ○HP: http://www.s-i-a.or.jp

実践事例

I

学校での活用例

- 対象：大津市立仰木中学校3年生 29名
- 実施日：2010年11月22日(月) 5・6校時「総合的な学習の時間 人権学習」

授業の流れ

●アイスブレイキング

- ▷部屋の四隅
質問の一例「道に迷っている外国の方を見かけた時、あなたなら声をかけますか？」

●ワークショップ

- ▷「言葉がわからない」体験ゲーム
何が起った？(震災編) オリジナル版

●ふりかえり

- ▷ワークシートの記入
- ▷感想の共有

「部屋の四隅」とは、部屋の四隅に「はい」「いいえ」「どちらかといえば、はい」「どちらかといえば、いいえ」と書いた紙を貼るなどして決めておき、ある質問に対して参加者が自分の考えのところに移動するという簡単なアクティビティです。最初の質問について全員が移動し終わったら、各コーナーの人に、なぜそう思うのか意見を聞きます。すぐに、次の質問に移り、また全員が自分の考えのところに移動します。何回か繰り返し、最後に全体の感想を話し合うという手法です。

生徒の感想

- 多文化共生で言葉がわからないゲームをしたけど、ゲームじゃなかったら私は死んでるんだろうなあと感じました。言葉はわからないし、誰も助けてくれないとなったら、やっぱり誰であろうと死んでしまうと思います。だから、もし私の周りに日本語がわからない人がいたら、その人の分かる言葉で標示の紙をついたり、緊急事態の時などにその人を助けようと思いました。
- 言葉がわからないゲームをして、言葉の重要性について気づいた。言葉がわからないと何も理解できなかったのだから、絵などを描いて理解しやすくすればいいと思った。そして、言葉がわからない時には人と人の助け合いが必要だと思った。生まれた国が違って、仲良くすることが必要だと思った。
- 言葉がわからないと生きていくのは大変だと思った。
- 世界には色々な言葉があるから、他国に行った時などに困ることがあるかもしれない。そんなときは、周りにいる人たちが助けてあげるべき。助け合いは必要。
- もし、本当に地震が起って、私がまわりの言葉などがわからないと、きっと死んでしまうと思ったし、そうしないためにもまわりとのコミュニケーションも大切だと感じました。



意味がわからない標示の付いた水を飲む体験風景



カラーベルトは、お腹を壊してしまった人という目印

実践事例

II

自治会等での活用例

- 講座名：平成22年度 滋賀県自主防災組織リーダー研修会
- 主催：滋賀県、(財)日本防火協会
- 対象：県内の自主防災組織や自治会のリーダー・役員、県・市町・消防の担当職員等 64名
- 実施日：2011年1月22日(土) 13:00~14:00

研修の流れ

- 外国籍住民の状況についてクイズを交えながら解説
- ワークショップ ▷「言葉がわからない」体験ゲーム
何が起った？(震災編) 短縮版
- 日本語から情報入手が困難な外国人の状況などの紹介
- 地域で多文化共生の視点から取り組んでいただきたい具体例の紹介

参加者の感想

- 外国人の立場に立って見ないと、分からないこと、気づくことがあると感じた。言葉というのは大切だと思ったし、不安な気持ちになったので、これから考えていかなければいけないと感じた。
- 災害が起って、パニックになっている上に、分からない言葉が飛び交ったり、アナウンスされると「不安」という言葉だけでは表せないような状況になると思う。また、方言などもあり、余計に訳がわからなくなると不安でしょうがないと思った。どちらでもいいから、まずアクションを起こして共生のスタートラインに立つことが大切だと感じた。
- 分からない言語での会話の中に30分もいたら、頭がおかしくなると思う。確かに立場が逆だったら…と思う。「言葉が通じなくとも、心は通ずる」とごとくお互い視線を下げて思いやる気持ちが大切! 外国の人にも人一倍努力してほしい。(語学、習慣等)
- その時言葉がわからなくても、なんとか伝達の方法を探し求める努力をしたい。気持ちの上で、相手の側に立って接していきたい。
- さっそく自治会へ災害時多言語情報表示シートを設置しておきたい。
- 私も英語圏外のローカル空港で飛行機が遅れ、乗り場も変わったようだったが、日本語、英語は通じないので、大変心細く不安になったことがあります。スピーカーから流れる言葉は、そのたびに不安を増大する。冷汗がふきだし大変苦しかったです。在来の外国人も同じことだろうなあと改めて思いました。なんとか外国人の方たちを自治会活動へ誘い入れたいと思います。
- 子どもは順応が早いため、言葉も早く覚える。純真な心がそうさせていると思う。そのためにも交流の大切さをひしひしと感じるので、異文化交流の機会をつくること、また積極的に参加することが大事だと思う。
- 他府県から引っ越してこられた日本人の方と同じく、外国の方にも近所の者が声掛けをしていくとよいと思います。これは、私の今の経験です。隣にベネズエラの家族がおられ、5年目です。今では、河川愛護作業も運動会も参加してもらっています。留守の時は、子どももうちに来て親の帰りを待っています。
- 多言語表示シートの存在さえ、一般的には知られていない。自治会内でも宣伝します。
- 公共場所への標示(避難所などの外国語標示)を試してみたい。まず、外国の当該者の方に提示して意見を聞いてみたい。



さて、どちらの標示に従って避難しますか?



多言語標示の具体例の紹介